HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	研修報告
Citation	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場技術業務報告, 8, 98-107
Issue Date	2008-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35014
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p98-107.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

平成 19 年度全国大学附属農場協議会に参加して

橋本 哲也・八巻 憲和

平成 19 年 10 月 11 日、全国大学附属農場協議会秋季全国協議会が宮崎県にある宮崎観光ホテルで開催された。今回、北海道大学からは荒木肇農場長を始め、北方生物圏フィールド科学センター事務長補佐の土本力生氏、そして技術職員からは八巻憲和氏と私、橋本哲也の４名が参加した。

全国大学附属農場協議会は昭和 24 年に発足し、全国の大学附属農場やセンターの運営及び教育研究に関わる諸問題を協議してきた。現在、農学部系附属農場をもっている 53 の国公私立大学が加盟している。今回の協議会においても全国からおよそ 125 名の教官・事務職員・技術職員が参加していた。下記にその協議内容を簡潔に紹介したい。

◆第１日目（H.19.10.11）全国協議会

QuickTimeÿÇ°
TIFFÃIÒÀÀÀ ÆLÆÉÆÇÆOÆÀÉÀ
Ç™CsÇÁÉsÉNÉ´ÉÉÇ¾Ä©ÇÉÇ‰Ç¾Ç…ÇÒÍKóvÇ-ÇÁB

1. 会務報告　平成 19 年度春季協議会以降の会務報告

2. 協議事項

（1）大学農場技術賞選考について

「若手枠を設け、昇格・昇給にも反映させたい」

「グループ（連名）での受賞を認めて、受賞機会をより増やして欲しい」

→　幹事会においては、上記２つの事項を認める方向にある。

3. 承合事項

（1）農林水産省主催の「教育ファーム」について（食育推進企画調整室）

35 大学附属農場・センターから回答があったアンケート結果を紹介し、今後の方向性を示した。

①大学附属農場・センターが実際に農業を営んでいる農業者として認められるかどうかの確認をして、教育ファームに参加できるかどうかを明確にする。　→　農林水産省からの回答待ち

②協議会として教育ファーム事業に参加することはしないが、意思のある加盟校の参加を積極的に支援する。

③大学らしい取り組み（学校教育者の指導、アドバイザー的な参加など）を教育ファームに取り入れてもらうように農水省に要請する。

（2）農学部附属農場畜産部門等における大学間ネットワークの構築（九州大学）

「九州ブロックでは、家畜改良センターとのプロジェクトはあるが、大学農場をまたがるプロジェクトはないため、全国レベルで畜産部門のネットワークを構築し、共同研究プロジェクトを行いたい。」という意見が出された。

（3）技術職員の技術交流について（千葉大学）

35 大学附属農場・センターから回答があったアンケート集計結果（一部）

①他大学との人事交流（研修含む）の実績がありますか?　**ない→20 校**　**ある→15 校**

②①で「ない」と答えた場合、現在、人事交流を検討していますか?　**いいえ→19 校**　**はい→1 校**

③人事交流以外に技術職員の活性化等についての工夫がなされていますか?

［例:民間企業へ１ヶ月研修派遣］　**はい→18 校**　**いいえ→12 校**　**無回答→5 校**

「他の活性化されている農場に派遣することにより、刺激を受け技術研鑽することは重要なことであ

り、今後、人事交流できる情報の場が必要である。」とされた。

(4)「環境を配慮した安全な食材生産」を取り入れた農場実習について（石川県立大学）

草取り、施肥、土づくりは、農業生産基本作業の主要項目である。この内容を新たな視点で見直し実習メニューの選択肢とする。

1.草取り量や雑草が抑えられる作業を体験学習させる

2.施肥環境により野菜や地下水中の硝酸濃度の変化を観察させる

3.健康な土を作るには、どうしたら良いか体験、考察させる

4.報告事項

(1) 大学農場間の連携研究の推進について**（荒木農場長）**

大学間の連携研究には、各大学の要求が統一され、役割分担も明確になっていなければならない。北大に「全国大学フィールド科学ネットワークオフィス」を設置するためには、農場協議会はもちろん演習林や理学系、水産系の承認や後押しが必要である。これらのことを勘案し、文部科学省に大学間連携研究として申請したい。

(2) 平成 20 年度全国農場教育賞・技術賞の募集について

技術賞の選考基準（「全国大学農場技術賞選考基準」より抜粋）

1)選考基準 1:以下に示す要件を満たしていること。

①当該事業・活動に対する積極的貢献と実績

②創意・工夫に関する継続的な実績

③活動がもたらした具体的な効果

2)選考基準 2:以下の要件を満たす場合には積極的に評価する。

①学内外に対する波及効果が認められる。

②学術論文・雑誌・記事の投稿、学位の取得、職務の遂行に関する専門的な資格の取得

③地域に対するタイムリーかつ継続的な各種サービスの提供に対する貢献

④学内外で成果を発表するなど積極的な姿勢が認められる。

⑤活動が学内報やマスコミ等に取り上げられた実績

⑥他の職員の範になるとともに、後進の指導等リーダーシップに関する実績

(3) 平成 19 年度「1 大学 1 農場アピール」の募集について

作成様式について

1.A4 版（縦置）に片面印刷で 1 枚にまとめること。

2.文章は横書きに統一すること。

3.できるだけカラー印刷にすること。

4.左側に綴じ代として 3cm 空けること。

5.10.5 ポイント以上の文字を利用すること。

＊　本農場の平成 19 年度「1 大学 1 農場アピール」は、高虫慧子技術職員が作成し、提出済み

(4) 今後の日程について

平成 20 年 5 月 8 日（木）～ 9 日（金）平成 20 年度春季全国協議会-----ホテルフロラシオン青山

平成 20 年 9 月 4 日（木）～ 5 日（金）平成 20 年度秋季全国協議会-----日本大学（神奈川県）

教育研究集会シンポジウム「生産現場からの食育の取り組み」

Ⅰ「魅力ある有機農業をめざして」

消費者が求める有機農産物を生産者が責任を持って提供し、自然生態系農業の推進と合わせて、綾町ブランドの確立の取り組みについて提言

話題提供者 ： 有限会社松井農園 取締役　松井　道生　氏

Ⅱ「安心安全の立場からの食育の取り組み」

安心・安全な食べ物を求めるならば「食べ物」が生活すべての中心にあることを提言

話題提供者 ： 綾スローフード協会 会長　濱田　倫紀　氏

Ⅲ「食育空白世代、働き盛り世代への食育アプローチ」

若年成人の将来の健康づくりの上からも自分の健康課題に気づき、望ましい行動に変容できるような効果的な介入のあり方について提言

話題提供者 ： 南九州大学健康栄養学部管理栄養学科　教授　田上　敬子　氏

Ⅳ「冬の使者が宮崎県に立てた波紋　高病原性鳥インフルエンザ」

畜産物生産の現場で、HPAI 発生に備えてどのような予防対策がとられているか。HPAI 発生後、迅速な防疫対策がどのように行われたか。さらに、発生が危惧されている新型インフルエンザと HPAI との関係について提言

話題提供者 ： 宮崎県農政水産部宮崎家畜保険衛生所　主幹　清武　　真　氏

パネルディスカッション　～　コーディネーター ： 南九州大学園芸学部附属農場長　川信　修治　氏

平成 19 年度全国大学農場技術賞・教育賞表彰

1.大学農場技術賞受賞者（被推薦者 12 名の中から 5 名が受賞）

(1) 浜村　欣二（S.22.9.16 生）　帯広畜産大学

「農場業務の管理運営に関する創意工夫」

(2) 坂本甚五郎（S.22.9.16 生）　岩手大学

受賞した方々。マイク前の方は畜大の浜村氏

「寒冷地における水稲の高位安定栽培技術実証・展開に関する教育研究および地域への貢献」

(3)秦野　茂（S.27.11.13 生）　東京大学

「持続的植物生産学に係る研究・教育活動の活性化への技術的貢献」

(4)野久保　隆（S.35.12.17 生）　岡山大学

「和牛の改良における繁殖技術の応用及びその実習教育への展開と地域産業に対する貢献」

(5)福留　功（S.23.10.30 生）　九州大学

「ブドウの新品種育成とその栽培管理技術の確立」

2.農場教育賞受賞者（被推薦者 3 名の中から 3 名が受賞）

(1)長谷川　和久（S.18.1.30 生）　石川県立大学

「大学農場における農業生産環境教育と地域貢献」

(2)田島　淳史（S.32.3.15 生）　茨城大学

「わが国における農業教育カリキュラムの分析による

フィールドサイエンスセンター教育構築へのアプローチ」

(3)内田　好則（S.24.11.9 生）　宮崎大学

「農作物と人を育てる教育の実践」

◆第 2 日目（H.19.10.12）現地視察

南九州大学農場の温室

第２日目の現地視察は晴天に恵まれたが、視察用バスの突然の故障トラブルによる出発時間の遅延もあり、かなり駆け足の現地視察になった。しかも、協議会参加者が全国から来ていることから早めの解散時間を設定していることも起因していたようだ。

Ⅰ.南九州大学高鍋キャンパス　園芸学部附属農場　見学

南九州大学は、宮崎市にある宮崎キャンパスと高鍋町の高鍋キャンパスを持っている。前者には健康栄養学部、後者には園芸学部・環境造園学部が置かれている。平成 21 年 4 月、高鍋キャンパス（園芸学部・環境造園学部）は都城市への移転計画がある。

○ 沿革

昭和 42 年 4 月　附属農場が設置される。

昭和 57 年 4 月　造園実習場が農場に併合される。

平成 8 年 4 月　造園実習場が分離独立する。

平成 11 年 4 月　農場ガラス温室竣工。

○ 教職員数

附属農場長、農場主任、農場専任教員（准教授各 1 名）、実習担当教員（教授 2 名、准教授 4 名）、農場技能員 4 名、農場事務 1 名

○ 土地利用（総面積 4.5ha）

温室 0.75ha、果樹 1.2ha、花卉 0.1ha、蔬菜 0.25ha、環境保全 0.26ha、農業機械実習用地 2.0ha

○ 主な建物

倉庫 3 棟、調整棟 2 棟、園芸資材倉庫 1 棟、園芸農機倉庫 1 棟、農場温室用ボイラー室、燃料庫、温室 12 棟、ビニールハウス 2 棟

『南九州大学園芸学部附属農場概要』パンフレットより一部抜粋

Ⅱ.綾町有機農業　視察

綾町は、島津氏が明治維新まで支配したところである。明治22年に綾村になり、昭和7年に町制を施行して今日に至っている。位置は、宮崎県のほぼ中央にあり、宮崎市から西方約20ｋｍ、大淀川の支流・

本庄川をさかのぼったところにある中山間地域である。総面積9,521ｈａのうち約80%が森林で占められ、住宅及び農地等は町の東に広がる平野部に集中している。

気候は、南西日本のモンスーン気候帯に属し温暖多雨な地域で、地形の影響により山間部では寒暖の差があるが、平野部は丘陵に囲まれた盆地で一年を通して温暖な気候である。月別平均気温は、12月が7.7℃で最も低く、8月が28.9℃で最も高くなっている。

昭和63年、「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、生産者・農協・町が一体となって自然生態系農業の町づくりに取り組んでいる。平成13年からは、JAS法に基づく「有機JAS登録認定機関」として、有機農産物等の生産者の認定業務も行っている。

『綾町プロフィール』綾町パンフレットより一部抜粋

白く見えるのは宮崎県特産の日向夏の袋かけ

イモ焼酎の原料となるサツマイモ品種「黄金千貫」

視察した有機栽培農園は、農場協議会１日目の教育研究集会シンポジウムで講演して頂いた松井氏である。彼は、両親と妻、従業員３名の計７名で農業経営を行っている。主な作物は、稲 4ha、レタ ス 4ha、ニンジン 1ha 他、ブロッコリ、キャベツ、甘藷、馬鈴薯等である。彼が有機農業に興味を持ったのは、就農した 2, 3 年後以降という。平成７年には、外食産業会社への有機物野菜の出荷を始め、平成 14 年には有機 JAS 認定を受けている。そして、平成 18 年、農業生産法人「有限会社松井農園」を設立し、今日に至っている。

有機栽培レタスの畑

収穫後、株間に再度定植する（二期作）

Ⅲ. 酒泉の杜（雲海酒造）　見学

平成元年産業観光施設として酒泉の杜がオープン。酒造りを始め、ワイナリーやビール工房、ガラス工房、伝統工芸館、美術館等が集まっている。その他にも温泉やレストラン、宿泊施設も完備している。雲海酒造･綾蔵では、かめ仕込み･かめ貯蔵による手づくりの本格焼酎が出来るまでの見学コースがある。

酒泉の杜

雲海酒造の飛舞加乃門前

雲海酒造・綾蔵を見学するところ

綾蔵で生まれた本格焼酎

◆最後に

２日間の全国農場協議会に初めて参加して、北は北海道大学から南は琉球大学まで、気候や作付け品目、栽培法等の相違はあっても、一同に集結する意義は大きい。参加者は、農場長や事務職員ばかりでなく、技術職員の参加も多数あり、交流できたことは大変有意義であった。また、全国の大学農場の教育研究や運営に関する諸問題の協議やシンポジウムなども充実し、自分にとっては大変実になったと思う。普段、現場で働いている職員もこのような場で、見たり、聞いたりすることは、重要である。

最後にこのような機会を与えて頂いた荒木肇農場長始め、センター事務及び技術職員に感謝いたします。

会場の宮崎観光ホテル前に咲いていたハイビスカス（左）とブーゲンビリア（右）

平成 19 年度 新人職員研修レポート

内野 紀彦

はじめに

私は平成 19 年 4 月 1 日付けで採用，作物分野に配属になり，研修として 1 年間作物，園芸，畜産の各分野の業務を経験しました．学生時代は作物学を専攻し，作物以外の他の分野についての知識や技術はほとんどありませんでした．また，採用前に大型特殊免許，牽引免許を取得しましたが，これらを使って作業をしたこともほとんどありませんでした．そのため各分野でいろいろ経験を積んで勉強しようと心構えをして研修に望みました．以下に 1 年間の新人研修について報告します．

研修の内容

各月の研修分野と作業内容は表に示したとおりです．

各分野の感想等（研修順）

園芸：学生時代は稲，小麦，馬鈴薯などの食用作物のみしか扱わなかったので園芸作物についての知見が広がりました．果樹の剪定については，基本はある程度理解しましたが，剪定の結果が次の年になるまでわからないので特に長年の経験が重要だと感じました．

作物：他の分野でも言えるが作物分野では特に農業機械を扱えないと仕事にならないと実感しました．操作技術だけでなく機械に関する知識も今後身につけていきたいです．農場関係者以外の人が圃場を通路として使っていて周囲に一層気を配らなければならないと感じました．

中小家畜：１ヶ月の研修期間のうち北海道地区国立大学法人等技術職員研修や作物分野でのトラクタ運転実習があって中小家畜分野での実働期間が短くなってしまいました．短い期間ではあったものの，鶏だけでなく豚の飼養管理，ライ麦の収穫を経験できて中身は濃かったです．

畜産製造：12 月の繁忙期を経験できてよかったです．製造の流れは大体把握でき鶏の除骨も覚えることができましたが，豚の除骨については覚えきれなかったのが残念です．乳製品の製造は経験できませんでしたが，乳製品加工室の週 1 回の掃除や，機械の分解・組立てを行って勉強になりました．

大家畜：搾乳では分娩後，乳頭のけが，乳房炎等，牛の状態によって搾乳方法が変わり最後まで覚えることがいっぱいでした．2 度の分娩に立ち会えませんでしたが，起立不能になった牛の安楽殺と，その後の剖検のために獣医学部への搬送に立ち会えて貴重な経験になりました．

研修の総括

今回の研修で得たもので最も大きいのは，１年目で農場の各分野の技術職員，教員と知り合え，各分野の設備等を把握できたことです．研修の期間中にも分野間の連携が必要になったときがありました．例えば作物分野での研修期間中に，トラクタ運転実習で使用するトラクタを園芸分野から借りたり，学会懇親会用のトウモロコシを大量にゆでるのに畜産製造分野の二重釜を使用したりしました．農場全体のことを知るのに何年もかかるところを１年足らずで知ることができて，今後も自分が配属される分野で他の分野との連携がスムーズに行えると思います．他に得たことを挙げると，各分野と関わる農学部の教職員とも知り合えたこと，諸先輩から仕事の内容だけでなく仕事に対する姿勢や人生に関することなど貴重な話を聞けて勉強になったこと，そして作物に加え園芸や畜産を経験したこ

とで農業人として一回りも二回りも成長でき視野が広がったこと，です．

おわりに

ご指導いただいた各分野の方たちに厚く御礼申し上げます．私は頭の回転が良いほうではなく新しいことに適応するのに少し弱いのでご迷惑をかけたことが多々あるかもしれませんが，少しでもお役に立てたことがあれば幸いです．今後各分野で身につけたことを今後の職務に活かしたいと思います．

表．各月の研修分野と作業歴

	分野	主な作業内容		その他特記事項
4月	園芸	・ナシ，リンゴ等剪定枝結束，運搬 ・リンゴ腐らん削り ・アスパラガス除草 ・除草剤散布	・播種後トマト，アスパラガス，ハーブ，花等灌水 ・実習（トマト接木，鉢上げ，小果樹冬囲い外し）	16～18日：初任職員研修
5月	作物	・馬鈴薯，トウモロコシ，大豆，小豆耕耘，播種 ・防鳥糸，防鳥網張り ・水田施肥，代かき，田植え，補植	・実習（馬鈴薯，トウモロコシ，大豆播種，田植え，耕耘機実習）	21日：余市果樹園見学
6月	園芸	・アスパラガス収穫，選別，施肥 ・圃場除草，草刈 ・リーフレタス収穫 ・リンゴ幼木用支柱パイプ打ち込み	・養蚕：収繭，毛羽とり ・実習（トマト芽かき，誘引，ホルモン剤噴霧，アスパラガス定植，リンゴ摘果） ・ハーブ・花苗販売	8日：安全教育講習 12日：ドラグショベル（静内研究牧場所有）練習 20日：教育研究評議会傍聴
7月	中小家畜	・鶏：給餌，除糞，採卵・洗浄・パック，育雛ケージ洗浄・設置，雛移動 ・豚：給餌，除糞，超音波妊娠診断，採精補助，出荷，屋外放牧場	・トウモロコシ粉砕，飼料調製，ライ麦収穫，畜舎内温度・湿度等記録 ・実習（鶏：翼帯つけ，採精，授精，豚：体重測定）	11,13,23日：トラクタ運転実習（作物分野） 18～20日：全学技術職員研修，植物園見学，樹木診断
8月	作物	・トウモロコシ，枝豆，馬鈴薯収穫 ・燕麦，ライ麦ストローチョッパー ・水田防鳥網補修 ・休耕田耕耘	・スプレーヤー用台車製作 ・実習（馬鈴薯収穫，選別，枝豆収穫，長沼町駒谷農場見学）	
9月		・枝豆収穫，大豆，小豆刈取，島立て ・水田通路集草，はさ設置 ・稲刈り（コンバイン，坪刈り，実習） ・実験用稲収量調査	・馬鈴薯収穫体験販売 ・スプレーヤー用キャスター取り付け ・学会懇親会用トウモロコシボイル，冷凍（於畜産製造施設）	2日：農場一般公開
10月		・稲わら切込み ・籾摺り，精米，袋詰め ・はさ掛け稲脱穀 ・はさ撤去	・大豆，小豆脱穀，選別 ・馬鈴薯選別，箱詰め ・アルファルファストローチョッパー	26日：畜魂祭，収穫祭
11月	畜産製造	・ボイルドチキン製造 ・ロースハム製造 ・ベーコン製造 ・プレスハム製造 ・ボロニアソーセージ製造 ・スモークドチキン製造	・加工場掃除 ・製造機械洗浄 ・包丁研ぎ ・加工場周辺有刺鉄線外し ・トラックタイヤ，ワイパー交換 ・冷却塔掃除 ・冷凍庫内在庫確認 ・蒸気配管修理	8日：ふいご祭
12月				
1月	大家畜	・搾乳，哺乳，育成牛給餌，除糞 ・牛体ブラッシング ・自動給餌機用ストッカーへサイレージ等投入 ・育成牛用サイレージ運搬 ・バルククーラー洗浄 ・休日前在庫等確認 ・除雪		
2月				
3月	園芸	・ナシ，リンゴ，サクランボ等剪定または伐採 ・ラズベリー，ブルーベリー剪定 ・トマト播種	・播種後トマト，アスパラガス灌水 ・ビニルハウスのビニル張り ・作物水稲育苗ハウスのビニル張り ・ガラス室整理，苗床準備	4～6日：センター技術職員研修，旋盤・フライス盤実習

平成19年度国立大学法人北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
耕地圏・水圏ステーション技術職員研修日程表

於　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター講義室　ほか

月日＼時間	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00	16:30	17:00
第1日 3月4日 (火)	開講式	講　義 「環境保全研究と技術職員の参画－森林圏ステーションのとりくみから－」 北方生物圏フィールド科学センター センター長 教授　笹　賀一郎		講　義 「魚類の血清蛋白を指標とした環境ホルモン評価」 北海道大学 水産科学研究院 助教　平松　尚志		休　憩		実　習 プラズマ切断・溶接機利用による工作実習 旋盤・フライス盤利用による工作実習 (北方生物圏フィールド科学センター)							
第2日 3月5日 (水)	技術発表 静内研究牧場　川畑　昭洋 植物園　永谷　工 生態系変動解析分野 福井　信一 生物生産研究農場 橋本　哲也 八巻　憲和			講　義 「家畜の外傷処置の新しい試み」 生物生産研究農場 技術専門職員 髙橋　太郎		休　憩		施設見学 ・江別市広域米乾燥調製施設「瑞穂の館」 ・王子特殊紙(株)江別工場						懇親会	
第3日 3月6日 (木)	講　義 先輩講話 生物生産研究農場 技術専門職員　堀　廣孝 技術専門員　田村　春人			講　義 「バレイショ乾燥抵抗性品種「根優」誕生秘話」 北海道大学 大学院農学研究院 教授　岩間　和人		休　憩		安全講習 「普通救命措置Ⅰ」 財団法人　札幌防災協会						閉講式	

(都合により予定の一部を変更することがあります。)

平成19年度国立大学法人北海道大学北方生物圏フィールド科学センター
耕地圏・水圏ステーション技術職員研修　　受講者名簿

番号	所　　属	職　　名	氏　　名
1	耕地圏ステーション生物生産研究農場	技術専門職員	生　田　　稔
2	〃	技術専門職員	市　川　伸　次
3	〃	技術職員	内　野　紀　彦
4	〃	技術専門職員	河　合　孝　雄
5	〃	技術職員	葛　間　風花子
6	〃	技術専門職員	佐　藤　浩　幸
7	〃	技術専門職員	新　海　秀　史
8	〃	技術専門職員	平　　克　郎
9	〃	技術職員	髙　虫　慧　子
10	〃	技術専門員	田　村　春　人
11	〃	技術専門職員	角　田　貴　敬
12	〃	技術専門職員	橋　本　哲　也
13	〃	技術専門職員	茂　木　紀　昭
14	〃	技術専門職員	山　田　恭　裕
15	〃	技術専門員	若　澤　幸　夫
16	耕地圏ステーション植物園	技術職員	大　森　　誠
17	〃	技術職員	髙　谷　文　仁
18	〃	技術専門職員	永　谷　　工
19	耕地圏ステーション静内研究牧場	技術職員	猪　瀬　善　久
20	〃	技術専門職員	川　畑　昭　洋
21	水圏ステーション臼尻水産実験所	技術専門職員	野　村　　潔
22	共生生態系保全領域生態系変動解析分野	技術職員	福　井　信　一
23	農学研究院・農学部技術部	技術職員	和　田　友　則
24	帯広畜産大学畜産フィールド科学センター	技術職員	上　杉　幸　子

（名簿は施設等毎の五十音順）